

# Glocal Tenri



3

月刊 グローカル天理 Monthly Bulletin Vol.25 No.3 March 2024

天理大学 おやさと研究所 Oyasato Institute for the Study of Religion, Tenri University

## CONTENTS

### ・巻頭言

宗教は信仰するもの？実践するもの？  
／井上 昭洋 ..... 1

### ・天理教の異文化伝道と「文化」の「翻訳」 (10)

本連載における「翻訳」について⑨  
／加藤 匡人 ..... 2

### ・台湾の社会と文化—天理教伝道史と災 害民族誌 (18)

戦時体制と敗戦  
／山西 弘朗 ..... 3

### ・社会福祉からみる現代社会—天理教の 社会福祉活動に向けて— (13)

子育て支援における天理教の社会福祉  
活動 (1)  
／深谷 弘和 ..... 4

### ・コロンビアへの扉—ラテンアメリカの 価値観と教えの伝播— (32)

7. コロンビアの非日常 1 その 4  
カーニバルと天理教祭典  
／清水 直太郎 ..... 5

### ・ニューヨーク通信 (19)

アメリカ伝道庁創立 90 周年  
／福井 陽一 ..... 6

### ・おやさと研究所ニュース ..... 7

第 363 回研究報告会／2023 年度伝  
道研究会／2023 年度公開教学講座の  
ご案内／2024 年度公開教学講座の  
ご案内／2023 年度おやさと研究所 特  
別講座「教学と現代」

## 巻頭言

### 宗教は信仰するもの？実践するもの？

おやさと研究所長 井上昭洋 Akihiro Inoue

私はハワイ人とキリスト教の関係やハ  
ワイ人の主権運動などについて研究してきた。  
ハワイでは、他の太平洋の島々と同様、19  
世紀のキリスト教化によって伝統宗教が社  
会の周辺に追いやられてしまった。伝統的  
な宗教文化の一部が習慣として残っていた  
り、カフナと呼ばれる宗教職能者(祭司・  
民間治療師)が活動していたりするが、ハ  
ワイ人の多くは敬虔なキリスト教徒である  
と言って良い。しかし、1980 年代後半以降、  
言語を含む伝統文化の復興(ハワイアン・  
ルネサンス)が進み、多くの社会的文脈に  
おいて伝統宗教およびその価値観が顕在化  
してくると、先住民の主権を取り戻そうと  
するハワイ人活動家の中には、伝統宗教に  
回帰する者も出てきた。

学位論文のための調査をしていた時に目  
にした地元紙の記事がある。それはハワイ人  
の主権運動家へのインタビュー記事で、彼  
女に運動の意義と今後の展開を問うもので  
あったが、その最後に主権運動とキリスト教  
の関係についての質問がなされていた。カト  
リックの家庭に生まれ、カトリックの学校に  
通った彼女は、両親の離婚をきっかけに教会  
を離れた後、長年にわたり「チベット仏教の  
実践者(a practicing Tibetan Buddhist)」であ  
った。しかし、ヘイアウ(古代寺院)が発見さ  
れた溪谷で高速道路建設の反対運動をして  
いた時に伝統宗教(the traditional practices)  
を学び始め、今では「伝統宗教の実践者(a  
traditional practitioner)」であるという。ハ  
ワイ人の伝統的な価値観を前面に押し出す主  
権運動において、キリスト教徒でいること  
には困難が伴う。伝統宗教の実践者であるほう  
が、その価値観を基盤に置く主権運動を行う  
際に葛藤は生じないだろう。彼女の改宗の物  
語にそのようなことを指摘することもでき  
るが、私とそのインタビュー記事を読んでい  
て気になった点は別のところにあった。

日本人が自身の宗教について語る時、「私

は〇〇教を信仰(believe)している」と述ベ  
ることが多い。もしくは「私は〇〇教の信者・  
信徒(believer; follower)です」または「私  
は〇〇教徒(Christian; Buddhist)です」と述  
べるだろうか。キリスト教であれ、仏教であ  
れ、民俗宗教であれ、宗教は「信仰するもの」  
である。神仏の存在を信じ、その教えを信じ  
るというように、頭の中で(日本的に言えば、  
心の中で)信じるものが宗教であると私たち  
は考えているのではないか。

一方、伝統宗教に改宗したハワイ人活動  
家は、インタビューで自身の宗教について  
説明する際に「実践する(practice)」とい  
う動詞から派生する単語を用いている。彼  
女の宗教的アイデンティティは信仰者(bel  
iever)ではなく実践者(practitioner)なので  
ある。辞書を調べると仏教にも practice と  
いう動詞は使われるようだが、キリスト教  
には使われないようだ。英語において、伝  
統宗教は儀礼行為を想起させる「実践」と  
いう言葉との親和性が高く、キリスト教は  
「信仰(belief; faith)」という言葉と親和性  
が高いだろう。それには幾つかの理由が考  
えられるが、その宗教が一般信者に親しく  
読まれる聖典を有しているか否かも関係し  
てくるのかもしれない。

宗教を巡る「信仰」と「実践」という言  
葉を考える時、天理教の場合は果たしてどう  
なるだろう。自らの宗教的アイデンティティ  
を表明する時、私たちは「私は天理教の信者・  
ようぼくである」と述べるのが常であって、  
自らを「天理教の実践者」と呼ぶことはほと  
んどない。しかし、単なる儀礼や儀式の実  
践を超えて「教えに基づく生き方」にまで「実践」  
の意味を押し広げて、自らを天理教の実践者  
であると宣言してみれば、自身の信仰がより  
明確に見えてくるのではないだろうか。別席  
にも説かれるように、教えを「実地に身に行  
う」ことの重要性は、お互いに重々承知して  
いるのだから。

## 本連載における「翻訳」について ⑨

前回(1月号)では、ハーバーマスの翻訳の捉え方に対してのタルル・アサドの批判を紹介した。その中でアサドは、純粹な意味での「認知的行為」に翻訳の射程を限定するハーバーマスに対して、言語とは特定の生のあり方を具現化したものであり、宗教的言語の翻訳を考える際には、それを単に政治的主張の根拠のためのものに切り縮めるのではなく、感性的な要素を排除せずに他者の生き方を想像し、それを生きることによって、はじめて自らのものと同等の言語として翻訳ができるのである、と論じている。

この感性や生のあり方という言わば「身体」の領域を踏まえた翻訳のあり方について、アサドは著書中の「翻訳と感覚ある身体」(原題: "Translation and the Sensible Body")の章で掘り下げて論じている。そこでは、主にイスラームの伝統における聖典の言語や儀礼のあり方を事例に取り上げており、その視点から、ハーバーマス等が唱えるポスト世俗主義における宗教の「翻訳」について更に批判的な考察を深めている。

まずアサドは、イスラームの聖典であるクルアーンの特質としてよく取り上げられる「翻訳不可能性」について触れている。キリスト教の聖書とは対照的に、イスラームのクルアーンには厳密な意味での「翻訳」は存在せず、他言語に訳出されたものはあくまで「解釈」であるというのは、宗教全般に関心のある読者の中ではおおむね周知のことであろう。アサドは、その翻訳不可能性を説明するにあたり、それは「クルアーンを、現世において、現世のことに関わるだけの記号の体系に過ぎないものに世俗化してしまうことに対する警告であるかもしれない」(アサド 2018 = 2021 : 84)と述べた上で、以下のように論じている。

クルアーンの翻訳不可能性は、それを啓示と見なすべきであることを示している。(中略)啓示には、それ自身の用語でしかアプローチできず、それが何であるかを決定することすら容易ではないことがしばしばある。(中略)私の提案は、特に礼拝の場でクルアーンが原語で詠唱されることは、(物理的—感情的—認知的な)特定の態度であり、その翻訳不可能性は、この感覚にとって固有の、特別な意味を持っているということである。アラビア語という言語が聖なるものなのではなく、超越的で創造的な力と信じられているものが現前する場における、神聖なる価値の宣言が聖なるものなのである。つまり、(クルアーンのテキストではなく)崇拝の行為が非翻訳的なものであり、その完全な意味は(七世紀のアラビア語を現代アラビア語で説明している辞書があるとしても)辞書の中で与え得るものではなく、涵養(cultivation)を必要とするものなのである。

(同上 : 88、強調点は原文ママ)

筆者はイスラームについては全くの門外漢であるので、アサドのイスラーム理解についての議論には立ち入らない。しかしここで注目すべき点は、クルアーンのテキスト自体ではなく、崇拝という行為が翻訳不可能なものであり、その意味を捉えるには涵養(cultivation)が必要とされるという指摘である。これは、前回(2023年11月号)に取り上げた、アサドにおける「翻

訳」のあり方の中核を成す議論につながる視点である。

すなわち、ここでの翻訳は、クルアーンのテキストが別の言語に翻訳されるという意味ではなく、「特定の儀礼の伝統と魂の規律という文脈における実践に翻訳される」のであり、それは言い換えれば、「クルアーンの言語が感覚ある人間の身体へと翻訳されること」(同上 : 94、強調点は原文ママ)とされる。すなわち、認知的行為のレベルを超えた、身体的な次元での翻訳というわけである。

そしてこの翻訳は、神聖なものから直接信者の身体へという形で起こるのではなく、「預言者の生という伝統的な表象——つまり、長年にわたり、友人から始まる一連の名のある個人によって伝達されたその発言と行動の説明」(同上 : 96-97)から生じるのであり、クルアーンをその権威の究極的な源泉としながら、預言者に倣うことで培われる行動パターンを指すものと論じている。

アサドはここから、イスラームの法学者、神学者、神秘主義者であったアブ・ハミド・アルーガザーリーの著作『宗教的知識の再興』を紐解きながら、自己の形成のあり方の話を進めていく。その自己を実現するには、さまざまな鍛錬が必要とされるが、そこでは伝統内における他者の存在の重要性が強調される。

自己は、自らの手によって自らを実現することはできない。それは、時間の中で、第三者(すなわち直接相互行為している相手以外の誰か)の視点をういた言説的伝統を通して形成される。日々の営みであれ、その潜在能力の完成であれ、自己の他者に対する依存は本質的なものであり、学習者やこの道をすでに成功裏に歩き通した人は、その成功と失敗を判断することができる。ガザーリーの倫理的語彙は、徳ある魂の形成を制約し促進する動態を扱っている。ガザーリーによれば、人間は、生まれながらにして神の規範に到達することを熱望するが、この世においては動物的身体に宿らざるを得ない。徳に対する熱望、覚醒、実現は、身体感覚を通してのみ可能になる。それは、他者との関係の内部での、その関係に関する理由付けに本質的である。

(同上 : 105、強調点は筆者)

このように、崇拝の行為の意味を理解するのに必要とされる自己の涵養とは、決して自己で完結するものではなく、ある言説的伝統の中で培われるものであり、それは必然的に他者を必要とし、身体感覚を通して可能になるものであるとアサドは論じている。

この知見、すなわち聖典の言語が感覚ある身体へ翻訳されるという捉え方は、イスラームに限らず、身体的な実践が大きな役割を占める言説的伝統に対して大きな示唆を持つといえるであろう。無論、天理教もその一つであると筆者は考えている。

[引用文献]

タルル・アサド(菊田真司訳)『リベラル国家と宗教—世俗主義と翻訳について』人文書院、2021年。

Asad, Talal. 2018. *Secular Translations: Nation-State, Modern Self, and Calculative Reason*. New York: Columbia University Press.

## 戦時体制と敗戦

これまで、1895（明治28）年に台湾が日本の統治下となつてから台湾において天理教がどのように布教を展開してきたかを、さまざまな視点から論じてきた。しかし、日本による統治も1945（昭和20）年の敗戦によって終焉を迎えることになる。そこで、今回は戦時体制から敗戦へと連なる台湾社会の状況と天理教について紹介したい。

1931（昭和6）年9月に満州事変が起こり、翌年3月には「満州国」が建国されたことで日中関係は悪化の一途をたどり、さらに1933（昭和8）年3月に日本は国際連盟を脱退し、国際社会で孤立を深めていった。そして1937（昭和12）年7月に盧溝橋事件が勃発し、日中戦争（支那事変）へと発展した。このように日本が戦争への道を突き進む中で、日本の統治下にあった台湾も、否応なく戦時体制の中に組み込まれていくこととなる。まず、それまでの文官総督制に代わって武官総督制が復活し、1936（昭和11）年9月に予備役だった海軍大将・小林躋造が総督に就任した。小林総督は、台湾人の「皇民化」、台湾産業の「工業化」、台湾を東南アジア進出の基地とする「南進基地化」を、台湾統治の基本とすることを表明した（伊藤潔、125頁）。

総督府によって推し進められた「皇民化政策」による官民挙げての社会・文化運動は「皇民化運動」と呼ばれ、国語運動、改姓名、志願兵制度、宗教や社会風俗の改革などが行われた。この内実は「台湾人の日本人化」であり、その背景としては、長引く戦争によって、日本の人的資源が枯渇する中で、日本の統治下である台湾に頼らなくてはならなくなったことがある。

国語運動は日本語の使用を推進する運動で、各地に日本語講習所が設けられ、日本語家庭が奨励された。日本語家庭とは家庭においても日本語が使用されるというものである。その過程で閩南語・客家語・原住民諸語の使用は抑圧され、また制限された。そして新聞の漢文欄が廃止された。

改姓名は朝鮮のような強制ではなく許可制であったが、日本式姓名を持つことが進学や昇進など社会的地位の上昇に有利にはたらく場合もあり、改姓名を行った台湾人もいた。

台湾に在住する内地人は以前から徴兵対象であったため、天理教の教会長や後継者も出兵することになった。日本と中国が戦争をしているため、中国に出自を持つ台湾の漢民族を兵士として採用することには反対が多かったが、兵力不足からやむをえず台湾人を対象とする志願兵制が開始され、ついに1944（昭和19）年9月には徴兵制が施行され、翌年4月から全面的に開始された。戦争に駆り出された台湾人の軍人は80,433名、軍属・軍夫は126,750名で合計207,183名、そのうち戦死および病死者は30,304名に上った（伊藤潔、131頁）。

台湾の宗教や風俗は、日本風なものに「改良」することが試みられた。具体的には伝統的な寺廟が取り壊されたり、神社に改築されたところがあった。また神像を集めて燃やし、昇天させることもあった。これらは「寺廟整理」と称される。詳細は宮本延人（1988）を参照。従来の中国風の結婚や葬式は日本風な神前結婚や寺葬に改められ、各家庭に神宮大麻（天照大神の神札）を配布し、祀ることが推進され、定期的に神社参拝するよう強要された。さらに、「壮丁団運動」や「部落振興運動」

などにより集落を単位として労力を動員し、公共工事、軍事施設建設、共同生産に従事させることもあった。このように皇民化は、「台湾人の日本人化」にとどまらず、戦時体制の完成と戦争遂行に向けて全台湾人を動員する大々的運動であった。

太平洋戦争開戦の前年にあたる1940（昭和15）年10月、第2次近衛内閣は「大政翼賛会」を発足させ、これに呼応して総督府は海軍大将・長谷川清総督の下、1941（昭和16）年4月19日に「皇民報公会」を設立させた。これは戦時体制の強化と台湾人の皇民化をさらに推進させることを目指したものであった。

天理教教会本部では1940（昭和15）年4月の「宗教団体法」の実施を受けて、教規改正が行われ、従来天理教内に組織されていた婦人会、青年会、教師会、健児団を統合し、「天理教一宇会」が結成された。翌年の発会式には3万人の会員が集結した。組織は庶務、男子、婦人、少年の4部から成り、教会本部教庁に中央部、各教務支庁、管理所、伝道庁に支部を設置した。これ以降、一宇会を中核として、炭鉱ひのきしんをはじめ、さまざまな活動が展開されたが、組織も活動も戦時体制下で国策に沿うべく強制されたものであった。

日中戦争勃発後、軍部の要請により、中国や台湾の軍施設へ教会本部から「天理教愛国少年団」として天理教の信者子弟が派遣され、天理中学校、天理外国語学校の生徒のみならず、内地の教会子弟はもとより、台湾の信者子弟も動員された。1938（昭和13）年2月の北支派遣にはじまり、この年に260人ほどが派遣された。同年末には中支、翌年には、台湾、太原、蒙疆、包頭、北京に派遣された。現地で言語を学び、その後、通訳や宣撫官に就いたようである。台湾から中支へ派遣された少年たちは現地で集団生活をしながら、軽作業を行った。

しかし、その後戦況は悪化し、1943（昭和18）年11月25日にはアメリカ陸軍と中国国民革命軍の連合部隊による新竹空襲を受け、さらに太平洋戦争末期になると台湾各地で空襲を受けるようになった。新竹、基隆、嘉義、彰化などの天理教教会が空襲で被災したり、空襲を逃れるために疎開するなどした。1945（昭和20）年5月31日には連合国軍の爆撃機による台北空襲を受けた。これは無差別爆撃であったため、約3,000人の市民が死亡し、重軽傷者と家屋を失った者は数万人に上った。この空襲によって、台北市内の多くの天理教教会も被災した。

戦況の悪化が続く中、同年8月6日に広島、9日に長崎に原爆が落とされ、日本はポツダム宣言を受諾して無条件降伏し、ついに8月15日の玉音放送によって第2次世界大戦がようやく終わることになった。そして日本は連合国軍の占領下となり、50年にわたる台湾統治を手放すこととなった。

[参考文献]

- 伊藤潔（1993）『台湾 四百年の歴史と展望』中央公論社。  
 黄昭堂（1991）『台湾総督府』教育社。  
 天理大学附属おやさと研究所編（2018）『天理教事典 第三版』天理大学出版部。  
 宮本延人（1988）『日本統治時代台湾における寺廟整理問題』天理教道友社。

## 子育て支援における天理教の社会福祉活動 (1)

天理大学人間学部准教授  
深谷 弘和 Hirokazu Fukaya

子どもを対象とした社会福祉は「児童福祉」と呼ばれてきたが、近年では、「子ども家庭福祉」「児童・家庭福祉制度」など、子どもだけではなく、親やその環境を含めて捉える名称が使われることが増えてきた。今回は、社会福祉からみる現代社会として、子育て支援を取り上げ、天理教の社会福祉活動について2回にわたって考察する。

## 子育て支援の現状

2023年は「異次元の少子化対策」や「少子化問題は待ったなしの課題」といった言葉によって、日本の子育て支援のあり方に関心が集まった。少子化問題の背景には、非正規雇用や低賃金などの経済的な問題によって結婚や出産ができない状況があり、単に「子育て支援」の充実によって、少子化問題が解決するわけではない。しかし、核家族化や、個人化が進む日本社会では、「孤育て」と表現されるように、つながりを欠き、誰にも相談することができずに、子育てに追われている世帯も少なくはない。2015年に厚生労働省が実施した「人口減少社会に関する意識調査」では、0～15歳までの子どもがいる人の7割が、子育てをしていて「負担・不安に思うことがある」と回答している。

内閣府の2019年の調査では、地域で子育てを支えるために重要だと思うことについて、「子育てに関する悩みについて気軽に相談できる人や場があること」と答えた人が5割近くになっている。子育て支援といった際には、経済支援や施設の充実といったハード面だけではなく、子育てを親だけの責任とせず、地域全体で子育てをしようという意識を高めるためのソフト面での支援が欠かせない。現在、子育てをしている世代の多くはきょうだいも少なく、周囲に子育ての「モデル」を見つけることが難しいとされている。気軽に相談できる相手が家族のみだった場合、その家族が遠方に居住していれば、近所づきあいなどが希薄になっている中、おのずと子育て世帯は孤立してしまう。児童虐待の問題がメディア等で大きく取り上げられるが、その背景には、子育て世帯の孤立問題があることを理解しておかなければならない。

## 子育ての安心感を生むソーシャルサポート

日本で少子化対策にいち早く結果を出した自治体に、岡山県奈義町がある。2014年に合計特殊出生率2.81となり、当時の全国平均の1.44を大きく上回ったことで、「奇跡の町」と呼ばれた。奈義町が、出生率を大きく伸ばしたのは、医療費の無料化や、育児支援手当などの豊富な子育てメニューを充実させただけではない。こうした子育て支援メニューは、他の多くの自治体でも実施されているものであり、出生率が上昇した大きな理由は、「3人目を生み育ててもいいかな」という雰囲気や地域住民の間で生み出していったことであった。子育ての悩みや困りごとを安心して相談することができることや、周りに3人以上の子育てを経験している同世代の親がいることなどによって、子育ての安心感は生み出されている。こうした安心感は、地域を挙げて、子育てを応援する意識を高めたことによって生まれている。

奈義町をはじめとして、少子化対策が効果を出している事例をみみると、子育て支援は、具体的に子育てのコツや方法をただ単に提供することではないことがわかる。誰もが書籍やインターネット等で、手軽に多様な情報を得ることができる情報社会では、情報を多く手に入れることができるからこそ「どうすればいいのか」「これで正解なのか」という不安が高まる。そうした不安を解消してくれるのは、ソーシャルサポートと言われる家族以外のつながりである。

内閣府による国際比較調査では、自国を「子どもを生み育てやすい国だと思うか」という質問に対して、日本は「そう思う」が38%であったのに対して、スウェーデンでは「そう思う」が97%となっている。スウェーデンの子育て世帯は、子育ての悩みを相談する相手が多様であり、家族以外に保育所や学校、地域の子育て支援センターなどに相談する人の割合が3～4割となっている。こうした現状に対して、日本の子育て支援政策では、子育て相談の拠点の整備が進んでいる。地域子育て支援拠点事業では、保育所や、公共の空きスペース、商店街の空き店舗、民家等を利用して、子育て親子の交流や相談・援助の場を増やしている。また、そうしたサービスを利用しやすいように、利用者支援をおこなったり、子育て世帯に保健師などが訪問する事業がある。また、子育て援助活動支援事業(ファミリー・サポート・センター事業)では、子育てを終えた世代が、サポーターとなって、家庭を支援する事業が全国的に展開されている。

## 妊娠から出産、子育てを切れ目なくサポートする

子育て支援に関して、各自治体で注力しているのが、妊娠から出産、子育てまでを切れ目なくサポートする体制である。一般に妊娠期は、医療機関を受診し、出産時は、保健センターなどの健診に移行し、子育て期においては、保育所や幼稚園などを利用する。縦割りになりがちな母子保健と子育て支援を一体的に提供できるように2017年に「子育て世代包括支援センター」が法定化され、各自治体で整備が進んでいる。この取り組みは、「ネウボラ」と呼ばれるフィンランドの子育て支援を参考としている。フィンランドでは、一家族を同じ保健師が継続的に担当し、必要に応じて、助産師やカウンセラー、ソーシャルワーカーなどの支援につなぎ、子育てに関するあらゆる相談に対応する仕組みが整えられている。

また、産前産後の女性をケアする「産後ドゥーラ」の養成と、配置も進んでいる。産前産後は、身体の変化だけでなく、ホルモンバランスの変化によって、精神的に不安定になることがある。産後ドゥーラは、育児生活への導入に向けて、家事のサポートなどを通して母親に寄り添い、傾聴し、サポートする役割を担う。

このように、近年の子育て支援をみていくと、子育て支援の孤立を防ぎ、新たなつながりを構築しようとする取り組みが進んでいることがわかる。不安を抱える人々に対して、「子育て」をきっかけにして、つながりを生み出すことが求められている。今回は、天理教の社会福祉活動として広がる「イライラしない子育て講座」などの取り組みも紹介し、今後、求められるあり方を探っていく。

## 7. コロンビアの非日常 1 その4 カーニバルと天理教祭典

元天理教コロンビア出張所長  
清水 直太郎 Naotaro Shimizu

コロンビアのお祭り、特に「カーニバル」を整理しているうちに、キリスト教が支配する国々・地域で、宗教における日常性と非日常性の区別や重なった部分が見え隠れし、私の頭の中で曖昧になってきた。そこで、このような「カーニバル土壌」の中南米地域の日常と非日常を再整理しようと思う。民俗学で言う「ハレとケ」、つまり「年中行事・お祭り・儀礼と普段生活」の入れ替わりが、中南米ではどうなっているのかについて確認したい。「祈り」とカーニバル

2011年～2014年、天理教コロンビア出張所は、首都ボゴタで行われた「平和のための宗教間礼拝式 (Liturgia Interreligiosa por la Paz)」と称する諸宗教イベントに3回参加した。手元の資料をみると、カトリックが9割以上というキリスト教の国の中で、ボゴタのカトリック司教のほか、長老派教会、メノニータ教会、セブンスデー・アドベンチスト教会などのプロテスタント系の牧師、日本からも仏教系のコロンビア曹洞宗の僧侶も参加していて、総数20もの教団の代表者が集った。

最初の十数分は一緒にスペイン語で共通するオラシオン（祈り文）を唱和する。先ず主要祭司が主文を唱え、その後私たち参加祭司（諸宗教の宗教者たち）が続けてその文に基づいたお祈りの文を読むスタイルであった。その中のある部分を紹介する。

主要司祭：「私たちはあなたによって創造されたワンファミリーということ存じています。しかし、私たちは自らの高慢のゆえに、私たちと同じように（神を）信じなかつたり祈つたりしないすべての人たちを差別してきました。」

司祭一同：「それゆえ、天の父なる神よ、あなたが私たちに憐みを下さることを祈り、汝の許しを請います。」

このようなやりとりが計10回も続く。何回も「神様、許し給え」なのだ。

その後は各教会・教団で5分程の独自のパフォーマンスを行った。私たち天理教のグループは「おつとめを披露できるなら参加してもよい」という約束を主催者側に伝えていた。「よろづよ八首」を鳴り物（笛・拍子木・ちゃんぼん・すりがね・三味線）をいれて勤めた。

そして「親神様は、陽気ぐらしをさせ、神様も共に楽しむために、この世・人間を創造されました。私たちはすべて親神様の子供であり、人類は皆兄弟姉妹であります。天理教の目的は「陽気ぐらし」社会の実現にあります。この喜びに満ちあふれたぐらしを実現するために、私たちはお互いを立て合い、人助けを実行しましょう」と締め括った。自負するわけではないが、約800名の観客は総立ちとなり拍手が鳴り止まなかった。私たちも嬉しさのあまり、のぼせ上がってしまい、会場に全ての楽器と神具を忘れてしまうほどであった。

コロンビアにおけるハレとケ

この経験を通して、コロンビア人は敬虔な信者であり、彼ら自身もハレとケ、宗教における日常性と非日常性を意識することなく生活に取り入れているのだ、と感じた。

「カーニバル」は本来宗教のお祭りである。キリスト教信者にとっては、カーニバル、聖週間（イースター）、クリスマスは典型的な年に1度の「非日常性」のイベントである。カーニバルは数日間、聖週間は文字通り1週間、クリスマスは2日間（クリスマス・イブの24日と25日）だ。敬虔な信者もそうでない人たちも老若男女が皆、生活や労働とは異なる時空間で日常を逸脱し

た演技やパフォーマンスに没頭する。

一方で、毎日もしくは週1回のミサの参列は「日常性」の習慣であり、「ケ」である普段の生活の一部だろうと推察する。多くのキリスト教会では週に3回以上、朝から夕刻まで、1日に数回ミサを行っている。コロンビアではこの十数年間、プロテスタント系の宗派の教勢が伸びていて、どこのプロテスタント系の集いでも1回の礼拝に二千から三千人は集めている。

この“集客力”はどこから来るのだろうか。思うに、まず牧師の説教が上手なことだ。何百、何千という聴衆を飽きさせない。話術も達者である（内容は私はよくわからない）。そして設定が「おしゃれ」だ。ミュージックあり映像ありで、コロンビアではこのような「ケ」（日常）があり、そこで精神を安定させて、「ハレ」のカーニバルやクリスマスなどの非日常性活動によって、エネルギーを蓄え且つ発散する。そしてまた、日常へと戻って行く。そういう構造なのだろう。

天理教の場合

天理教は毎月の月次祭と毎日の礼拝（朝勤め・夕勤め）がある。毎日の礼拝は信者にとって日常の行為であり、これによって心を澄ます。それに対して、月次祭の祭典は、どちらかという「非日常性」の性格が強い。

私は、岐阜県にある教会を15、16年前に訪ねたことがある。品のある女性の会長さんが何枚か写真を見せてくれた。「これね、昔の月々の祭典の時の様子の写真なんです。たくさんのお店が出てね。人もたくさん来て、賑やかでした。」その写真には教会の境内地はもとより、周辺の道路までも屋台が並んでいた。月次祭自体が「お祭り」、すなわちハレの行事として賑やかに楽しんでいたであろう。

コロンビアのお祭り（フィエスタ）では、歌と踊りそれに伴う飲食が中心であるが、規模の大小はあっても根本部分は案外似通っていることに気づく。

コロンビア出張所のバザー

コロンビア出張所でも、祭典として月次祭を行うが、参拝の人々のほとんどは信者であり、その家族・友人などが付き添ってこられているくらいで、非日常生活を楽しみに来ているとは言えないだろう。

その代わりに、年に1度「大ビンゴバザー」を行う。その名の通りビンゴゲームとフードバザーをメインとして、その売上げを施設に寄付するという目的があるのだが、このイベントには多く（約800名）の人たちが来所する。

来る訪問者も非日常で楽しむ目的があるだろうが、準備する側や付き添う側の信者にとってもこのイベントがハレである。バザーが終わると皆くたくたになって疲労困憊するが、達成感は大いにある。何カ月も前からの準備、当日の作業など、みな一つの目標に向かって作業をする中で、新たに始まる日常生活への糧になっているのである。



【2023年11月26日 天理教コロンビア出張所 大ビンゴバザー】

# アメリカ伝道庁創立 90 周年

天理教ニューヨークセンター所長  
福井 陽一 Yoichi Fukui

## アメリカ大統領選挙

2024 年、アメリカ社会にとって最大の関心事の一つがアメリカ大統領選挙の行方だ。今年 11 月 5 日の大統領選本選に向けて、民主・共和両党の候補者指名争いが始まっているが、4 年前と同じくバイデン対トランプという対決になりそうだ。ただいつもと異なる点は、トランプ氏は現在 4 つの事件で起訴され、91 の罪に問われていることだ。それにも関わらず支持層の共感を集め高い支持率を維持している。これは、おそらく大統領時代の経済、外交、移民対策などの実績への信頼と現政権への失望が強いからではないかと感じている。アメリカはもとより日本や世界の情勢に大きく影響を及ぼすこの選挙に対して、人々は緊張し心配しながら見守っている。

## 不法移民問題

2020 年の大統領選で勝利したジョー・バイデン大統領はメキシコとの国境地帯での移民融和政策を取ったため、不法に入国する人の数が急激に増えている。この 3 年間で約 1,000 万人の不法入国があったとされているが、実際にはその倍の 2,000 万人ぐらいが入ってきていると言われている。国境に隣接するテキサス州やフロリダ州は、それらの大量の移民をニューヨーク市などの都市部に移送しているため、ニューヨークでも大きな問題になってきている。

ニューヨーク市長のエリック・アダムス市長は、最初は不法移民を歓迎していたが、現在はシェルターに収容しきれず、緊急事態宣言を発し、連邦政府の支援を求めている。ホテルや学校がシェルターになっているところもあり、地域住民や父兄の反対が高まっている。ニューヨークの観光名所タイムズスクエアにある移民保護施設の前で警官が移民達に集団で襲撃されるという事件も起き、治安問題も表面化している。

## アメリカ伝道庁創立 90 周年

そのような激動の年であるが、来る 6 月 30 日にアメリカ伝道庁創立 90 周年記念祭が行われる。アメリカ伝道庁は、今から 90 年前の 1934 年に設立された。設立のきっかけとなったのは、前年 1933 年の 2 代真柱のアメリカ巡教だった。アメリカ、ハワイ、カナダにある 25 カ所の教会、伝道所を参拝になり、教友は勇み、教勢は一挙に燃え上がった。その様子を見られて、2 代真柱は、布教の中心となる機関を設置すべき旬の到来を察知し、翌年アメリカ伝道庁を設置する旨を発表して、辻豊彦を初代庁長に任命した。

2 代真柱の著書『アメリカ百日記』の序文の中では、次のように述べられている。「親神様は旬の到来によって、人間心では考えも及ばぬ事を、常に私達の眼前にお示しになっている。此の渡米の如きもその一つであると私は深く信じている。アメリカに対する親神様の思召は恐らく人間心の考えも及ばぬ程切実に急ぎ込まれているのだろう。私は渡米前よりも帰国後に於いて、一層その思いを強くした。アメリカは私



【レストラン「ベニハナ」1 号店のお祓い】

達の勤め場所の延長であると言う様な気さえしている。」

それ以来 11 代に及ぶ歴代庁長を芯として、第 2 次世界大戦をはさんで数えきれない苦勞の道中を教祖ひながたの道を目標に、世界たすけに挺身された先人方の真実の働きによる 90 年の活動に育まれていることは忘れてはならない。記念祭に向けてニューヨークセンター管内から 90 名の参拝目標を立てたが、現在それ以上の人々が参拝を予定している。多くの教友と参拝することで、喜びを分かち合いたい。

## ニューヨークセンター 50 周年

思えば伝道庁創立 40 周年に向けての記念事業の一環として、ニューヨークに伝道拠点を設置するというのが伝道庁の打ち出したビジョンだった。その契機となったのは、1971 年の中山善備 3 代真柱のニューヨーク来訪であった。現地の天理教関係者が 30 名以上集まり、真柱の誕生日のお祝いを兼ねた歓迎会が開催された。この真柱の来訪がきっかけとなって、ニューヨークセンターの設置の機運が高まり、具体化し、1977 年 1 月にアメリカ伝道庁の出張所として現在地に設立された。3 年後の 2027 年には設立 50 周年を迎える。50 周年を目指しての 3 年千日、新たな動きが始まっている。

昨年末、文化協会でのイベントで不思議な出会いがあった。ニューヨーク布教の先駆者の一人である吉田進氏がちょうど 60 年前の 1964 年にニューヨーク・マンハッタンでレストラン「ベニハナ」1 号店のお祓いを行ったが、その後このレストランはアメリカ日本食ブームの立役者となり、米国内で 80 店舗、全世界で 110 店舗にまで拡大した。その創業者ロッキー青木氏の夫人が文化協会のイベントに来訪し、文化協会の弓削マイケル主任と共に初めてお会いした。弓削主任は吉田進氏の孫にあたる。予期せぬ出会いお互いに感激し、60 年前の吉田進氏のこつこつ勤められた苦勞の道を彷彿させられた。

歴史を振り返り、先人の足跡を見つめ直して、アメリカ伝道庁 90 周年、ニューヨークセンター 50 周年の節目に向かってさらに一段と成人の道を歩めるように努力したいと思う。

第 363 回研究報告会 (11 月 29 日)

「車いすスポーツへの挑戦」

糸賀 亨弥

(NPO 法人ホスピタルフットボール協会代表理事)

糸賀氏は、現在、NPO 法人ホスピタルフットボール協会の代表理事を務めるかわら、天理大学アメリカンフットボール部の監督を務めている。今回の研究会では、糸賀氏が現在の活動に取り組むことになった経緯や、現在の活動内容が報告された。

糸賀氏と車いすアメリカンフットボールの出会いは、天理大学アメリカンフットボール部で活動していた学生が、試合中の事故が原因で、体の自由を失ってしまったことにさかのぼる。学生にもう一度アメリカンフットボールをさせてあげたいと考えた糸賀氏は、電動車いすや車いすを用いたアメリカンフットボールを模索した。アメリカでも車いすアメリカンフットボールが行われているが、アメリカで使用される電動車いすは制限速度が日本より速いため、よりスピード感があるという。糸賀氏は、車いすアメリカンフットボールの特徴を説明しながら、その共生社会への展望を指摘した。

また、病院で入院している子どもたちに対して、ホスピタルフットボールを行ったり、サイコロとカードを用いたボードゲームを開発したりすることで、病気の子どもたちを病院の外の世界とつなぐ試みも行ってきた。(澤井真 記)

2023 年度伝道研究会 (12 月 26 日)

「社会福祉法人学正会の歴史と現在の活動について」

金納 理一

(天理教蒲池分教会長・社会福祉法人学正会理事長)

社会福祉法人学正会のもとを辿れば、天理教蒲池分教会の金納伊之助初代会長が昭和初期頃、当時、差別的な扱いを受けていた地域のハンセン病の人々を教会に受け入れ、生活支援や就労支援を施したことが礎となる。

終戦後、当時天理語専在学中であった弊法人創設者となる金納学は、古野清人学長から、「天理教人としても本来の使命である救世済民の実をあげるべき重要な時期であるので、人間の内的指導としての布教活動と共に、外形的救済の場としての社会福祉事業の振興は、現在の急務である」との助言もあり、昭和 26 年、蒲池保育園を設立、その後、児童養護施設、障がい者支援施設、高齢者施設等を開設し、現在 13 施設 35 事業を展開している。

学正会職員一同は、「全ての人々が、自分中心の心遣いではなく、周りの皆さまの幸せを願い、互いに尊重し、助け合うような姿」、すなわち陽気ぐらし世界の実現を目指す、という信念で行動している。

その大きな理念を達成する手段として、児童福祉・障がい者福祉・高齢者福祉の運営、必要な専門的技術や知識の向上に努めると共に、カルチャー、クリエイティブ、コミュニティーといった心の 3C にも積極的に挑戦して、誰にも遠慮気兼ねする

ことなく訪問できるような環境とイメージを創造し、現在の短期的な思考重視の世の中から長期的な思考へ成長させていきたいと考えている。

特に力を入れているのは、SDGs と国際交流である。法人内の 12 名の SDGs アンバサダーを中心に様々な提案を行っている。卒園証書にバナナペーパーを採用し、「かまちアクポニ Lab」にて完全室内型アクアポニクス実験場を設置した。国際交流は、理念に基づき職員の採用枠を海外に拡げ、50 年以上にわたる韓国福祉団体との交流では、2023 年、蒲池雅楽部がソウルと木浦で演奏を披露した。

教会活動としても、表統領の「これからの道の歩み」を参考に、15 年先のビジョン「2031 年迄にみんなのハンガアウト教会を目指す～心の 3C の提供を通して～」を策定、ブラッシュアップしながら前向きに進めている。

私たちは、良き伝統を守りながら、新しい取り組みも行うと同時に、今までやってきたことをいかに新しく見せるかという視点も重視している。

「みんな勇ましてこそ、真の陽気という。面々楽しんで、後々のもの苦しますようでは本当の陽気とは言えん」と言われるように、今現在だけを考えて物事を進めていけば、次の世代は必ず苦難の道を歩むことになるだろう。次世代に少しでも利息をつけて、「陽気ぐらし」というバトンを繋ぐことが私たちの使命と肝に銘じ、目標完遂に近づきたいと思っている。

## 2023 年度公開教学講座のご案内

### — 信仰に生きる『逸話篇』に学ぶ (9) —

2023 年度の公開教学講座は、オンラインで配信しています。是非ご視聴ください。

- 第 1 回 6 月 井上昭洋所長 167 話「人救けたら」
- 第 2 回 7 月 尾上貴行研究員 168 話「船遊び」
- 第 3 回 9 月 金子昭研究員 122 話「理さえあるならば」
- 第 4 回 10 月 澤井治郎研究員 146 話「御苦労さん」
- 第 5 回 11 月 島田勝巳研究員 165 話「高う買うて」
- 第 6 回 1 月 堀内みどり主任 113 話「子守歌」

## 2024 年度公開教学講座のご案内

### — 信仰に生きる『逸話篇』に学ぶ (10) —

2024 年度の公開教学講座は、以下の日程でオンライン配信いたします。

- 第 1 回 6 月 井上昭洋所長 172 話「前生のさんげ」
- 第 2 回 7 月 澤井真研究員 114 話「よう苦労して来た」
- 第 3 回 9 月 岡田正彦研究員 135 話「皆丸い心で」
- 第 4 回 10 月 八木三郎研究員 36 話「定めた心」
- 第 5 回 11 月 森洋明研究員 85 話「子供には重荷」
- 第 6 回 1 月 調整中 144 話「天に届く理」

2023年度

# 天理大学おやさと研究所特別講座 「**教学と現代**」

## 社会の中で問われる宗教の役割と使命 —格差・ジェンダー、そして宗教の公共性—

【演題】現代日本社会と宗教の役割

【講師】熊田 一雄氏（愛知学院大学准教授）

2024年**3月25日**(月) 14:00～16:20

天理大学研究棟3階 第一会議室

研究棟正面西側の自動ドアから入り、エレベーターで3階に上がり、右側へお進みください

### プログラム

14:00～14:10	開会挨拶 井上 昭洋 所長 趣旨説明 金子 昭 研究員
14:10～15:00	講演 熊田 一雄氏 「現代日本社会と宗教の役割」
15:00～15:10	休憩
15:10～15:30	コメント① 堀内 みどり 主任 「ジェンダー論の視点から」
15:30～15:50	コメント② 澤井 真 研究員 「宗教の公共性の視点から」
15:50～16:20	質疑応答
16:20	閉会挨拶 井上 昭洋 所長

グローバル天理  
第25巻 第3号 (通巻291号)

2024年(令和6年)3月1日発行

© Oyasato Institute for the Study of Religion  
Tenri University

発行者 井上昭洋  
編集発行 天理大学 おやさと研究所  
〒632-8510 奈良県天理市杣之内町1050  
TEL 0743-63-9080  
FAX 0743-63-7255  
URL <https://www.tenri-u.ac.jp/oyaken/index.html>  
E-mail [oyaken@sta.tenri-u.ac.jp](mailto:oyaken@sta.tenri-u.ac.jp)

印刷 天理時報社

Printed in Japan